

# 近代化と「宗教」

米井 輝圭

近代以降の日本において、宗教に関する国家的制度の大きな節目となった時期といえ、言うまでもなく明治維新期と第二次大戦後ということになるであろう。どちらの場合も、それまでの制度を続けていくことができない状況が突然出来し、否応なく新しい体制づくりが必要とされ、重大な改革が行われたという点で、共通している。そして、さらに両者に共通していることとして、外国の制度が大いに参考とされたことも、特筆すべき特徴として挙げることができよう。すなわち、明治期には近代国家として、ヨーロッパやアメリカに対して外交上の不利益が生じないような法制度が求められたのであり、他方で大戦後には、勝利者—特にアメリカ—の要求に従って、従来体制が否定されたのであった。

これに比べれば、明治維新期の方は、外圧という要因は決して無視できないにしろ、日本が占領されたわけではなかったため、宗教制度はどうあるべきかという主題を、日本人自身が考えて議論するための、終戦直後とはまた違った余地があった。そこでは、早く先進諸外国について学び、ヨーロッパやアメリカでは「宗教」なる領域が存在して、社会や国家との間に一定の調整された位置を占めていることを知った、少数の先覚者たちの活動がみられたのである。

本稿では、わが国で初めて「宗教」という語を書きのこした森有礼とその周辺に焦点をあて、彼らが近代的意味での「宗教」という概念にめざめ、さらにそれを現実的な日本の社会・国家においてどのような位置を与えようと考えたのか、その一端を紹介してみたい。

## 「宗教」ことはじめ —薩摩藩士森有礼のロシア訪問をめぐって—

「宗教」という言葉は、仏教における宗派の教えというような意味としては古くから使われていた。しかし、わが国の歴史上、religionに相当する語として「宗教」という語を初めて使用したのは、後に初代文部大臣となった薩摩藩士森有礼であったとされている<sup>(1)</sup>。

薩摩藩が、時勢に対応するため、国禁を犯して18人の留学生を英国に送り込んだのは、年号が元治から慶応に変わる1865年のことであった。その若き一員として、ロンドン大学に学んでいた森は、翌1866年の夏期休暇を利用して、松村淳蔵とともに、国際感覚を広げるためにロシアへと旅行したのであった。そのときに森が記した日記が、『航魯紀行』（以下、『紀行』と表記する）である<sup>(2)</sup>。ここで記された記述の中に、日本で初めての「宗教」なる語句があったということになる。ただし、その全文が紹介されるのは下って昭和16年を待たねばならなかったのだが<sup>(3)</sup>。

森が訪問先としてロシアを選んだ理由の一端は、この『紀行』の初めにも記述してある。彼が常日頃から関心を抱いていた「世に名高き」ペテルスブルグを訪れようと考えたこと、また同地にいる日本人留学生と会って意見を交わしたかったこと、さらにイギリス人の仲介の便を得られたことが、彼をして訪露を決意させたのだ。当時、列強の中でも特にロシアは、その地理的

な立地と、性急な軍事進出を志向する国策とによって、日本にとって大いなる直接の脅威を与えずにはいられない国であった。森にもそうした意識があったためだと思われるが、この『紀行』の性格は、単なる紀行文ではなく、また雑駁な見聞録にもとどまることなく、ロシア帝国の国情を、自ら見聞した範囲で総合的かつ実用的にまとめ上げた、参考資料もしくは備忘録ともいべき色彩も帯びているのである。ここでの「宗教」にかかわる考察もまた、ロシア情勢を理解するための不可欠な一環として、一つの独立した項目として取り扱ったものと考えられる。

『紀行』の本文はロンドンから、ロシアのクロンシュタット港に向かい、かの国の滞在を経て再び同港を出港するまでのことがらを、日記の形式で描いたものである。ロンドンを発ったのはグレゴリオ暦の8月1日。翌日にはイギリスの港町ニューカッスルに上陸し、船の便を待つために一週間その地に宿泊した。この宿の亭主について森は興味深げにその人となりを書きとめている。亭主はミリーという名の50歳ぐらいの女性で、持病あって非常につらそうに見えたが、それにもかかわらず森らのために大変親切にしてくれた。しかもその態度は森の見るところ彼女の天性で、彼にとって「感動するに余りあ」る人柄なのであった。彼女の言うには、旅の空では物事がみな不自由なものだが、ましてや海の彼方の方々にとってはなおさらなので、少しでも不満足のことがあったら何でも遠慮なく知らせてくれれば、力の及ぶ限りのことは尽くそうとのことだった。そして森は、ミリーが語った背景にある考え方を、書き留めている。森の記述では「それ世の中人間の交と互に助け合て人も己も隔なくするが則上帝の此人間斗を他物と異り斯る靈物を生しめ玉ひし 御意也など、真情を明してかたられけり」となっている。ここでいう「上帝」とは、「御意」の上に敬意を表す欠字が置かれていることからみても、キリスト教の神を指していると読むことができよう。互いにへだてなく助け合うように、神が他と異なるものとして人間を創造したというのである。こうした記述を読むと、現在のわれわれの目から見れば、もともとミリーが大度の人物であったことは間違いないとしても、キリスト教の精神が彼女の並外れた親切さの基礎となっていたと理解できるように思われる。

しかし、当の森は、ミリーの内面には、天性としての親切さと、キリスト教信仰とが別の次元で同居していると認識したようである。これに続く一文で、森は次のように書いている。

如斯正直之人物にしてまた一方ニは耶蘇教を信心シ鬼神の説をとぐ事甚タ切也、剰へ日曜日等ニは是非同伴してお寺ニ行かんと誘引百万を以す、然るニ無心之われ、ら之を辞するにまた骨を折れり。

こうした書きぶりから推測すると、宗教的信念が彼女の親切さを支えていたというよりは、もともと正直を本質とする人物がその一方で信仰を持ち、宗教が親切心を一層増長させているという具合に、森が認識していたようにもとれる。この記事は8月3日条に載っているのだが、この年は8月5日が日曜日にあたっているため、おそらくミリーは毎日のように、森と松村を相手に、自身の信仰する神の話聞かせていたのであろう。ここは是非とも宿主の熱心な誘いをきっかけとして、教会まで同行して彼女が自身の信仰を再確認する現場を、森らに体験してもらいたかったところではある。しかし彼らにとっては、ミリーの信仰はあくまでも他者の宗教に過ぎず、その奇天人柄には大いに興味を抱いたものの、これをきっかけとして宗教と人格形成についての一考察を行おうという気持ちは起こらないのだった。

ひとつには、彼らはこの時間を利用してやっておきたいことが多かったという事情もあった。

森は3日の朝、ミリーの説く「上帝の御意」を聞いた後、自分らをロシアまで乗せることになっている船を見に、港に出かけている。なにしろ彼は当時一介の留学生に過ぎず、それも国禁を犯している以上、異国の地で頼りにできるのは藩からの乏しい送金だけで、それで何もかもを習得してこなければならぬ状況に置かれていた。たとえば彼らの立場では、不案内なままに老朽船の類が乗船として割り当てられていることもありえたのである。また、海事を修めることは、森にとって洋行の大目的の一つでもあった。実際彼は、早速乗組員の構成と各人の名前などを、『紀行』に詳細に記してもいる。当時の留学生は、まず第一に自分が生きていく環境のために多大な神経を使わねばならなかった。ゆえに渡航の目標にないもの、優先度の低いことがらについては、各自の感受性にしたがってその芽だけをつみとっておいたのである。概して滞在期間が短かった彼らの中から、後に啓蒙思想家としてとして多分野にわたる業績を残した人が出たのも、ひとつにはこういった姿勢によるものではなかったろうか。

この時の森には、のちに自分がイギリスからアメリカに渡ってキリスト教精神に基づくコロニーに身を投じることや、海軍士官ならぬ外交官として、日本の外交的立場を弁ずるために駐在先のアメリカで、論文“Religious Freedom in Japan”を発表すること、さらには文部省に転じて国民教化と宗教という問題に責任を負うなどの運命に自分があることは、むしろ知らなかった。とはいえ、このニューカッスルのささいな体験も、後年の彼の活躍の下地となる要素の一つとして、結果的には何らかの作用を果たしたのではないだろうか。私には、一介の市井の人である宿屋の主人の言葉を捨象することなく、あえて『紀行』に書きとどめておいたところに、森有礼の資質の一端をかいま見た気がするのである。幸いなことに「船は随分よき船にして檣三本也、随分大船と唱ふへし」ということで、船旅の条件は恵まれたものになると確認された。翌4日には、手話や点字の教育現場を見て驚いているが、これも後年の教育行政家森有礼にとって、なにがしかの血肉となる体験となったことであろう。また、教会行きを断った5日には、汽車で小旅行をして、要塞などを見学した後に、船便の斡旋に労あつた人物の家を訪問している。そして6日は、出航予定の前日だったので、昼過ぎに船に乗り込んでおり、あわただしいことであつた。

8月8日にニューカッスルを出航した船は、12日に「ア子マルカの都コーペンヘイゲン」の近くを通り、23日にロシアのクロンシュタット港に着いた。『紀行』の文章は、初めてのロシアの地であるこの港について、やや詳しく描写や説明を載せている。要塞の規模やその兵力について、また最大の貿易相手であるイギリスとの収支などについて、具体的な数字を挙げての細かい説明があるのは、やはりロシアの国情調査という意味合いがあるのだろう。24日には首都ペテルスブルグに到着し、イギリス商人モルガンなる人物の出迎えを受けた。さっそく同地に滞在している幕府派遣の日本人留学生6人と面会して大いに談じ合っている。薩摩藩士の森と彼らとでは、国内でこそ立場が異なるものの、ここでは遠く故国を離れた留学生同士であり、また「此人々等幸ニ関東魂を不持抱、類ニ京師を護する之志操あれり」ということもあつてか、打ち解けた雰囲気であつた。このあと橋耕齋という、ロシア軍艦に乗り込んで日本から密航してきた数奇な人物と会ったりもしている。他方で、首都の描写を通したロシア考察もさまざまに書き記してある。そのいちいち、ここでは取り上げないが、森自身が過ごしたロンドンとの対比でペテルスブルグの規模を描こうとしたり、全体的に具体的な数字データを用いて説明の客観性を持たせようとしている点などが、印象に残る。陸海軍の年間経費なども、英ポンドと日本金の両方に換算して

載せてある。

日本という地理的条件からロシアを見ていた人が、ロシアの首都から日本の位置を考えてみると、改めてその脅威的膨張を実感し、独特の感慨を持つようである。そのことは、『紀行』の次の一文にもよく現れている。「魯は斯る大国を帯ながら猶四方を呑んと欲し、終ニ満州等ハ併セシ由、且亦すでにアシヤの北方に魯国より黒竜江まで通路をこしらへ、当時二ヶ月を歴て魯都よりわが蝦夷地まで達すへし、恐るへし、魯人の世界に一帝たらんと之志心是皆世人の知る処にして不記して顯然也」。

このような列举の中で、「宗教」についての説明が出てくることになる。すでに英国留学を通して、人間の営みには religion という分野が固有に存在していること、そして宗教の分布は国や社会ごとに異なり、その地で基底的に存在する宗教が分化や社会を特徴づけていることを理解していたからこそ、ロシアを記述するにあたってその「宗教」に着目し、あえて項目を立てたのであろう。日本人の文章で初めて「宗教」という語が用いられた記念すべき箇所であるが、その用いられ方は現代の感覚からみても特に違和感などはなく、ごく当り前のように登場している。その部分を引用してみよう。

○此国ニは種々の宗教あり。内としてグリーキ〈ローマンカソリックと大同小異〉といふ宗旨甚た発拡せり、帝族はしめ皆是の宗旨也、帝城の内ニ中央ニ一寺ありて、毎朝帝族の看経所とぞ、外ニも極大家之殿中ニは如斯看経所ある場所もあり稀也。

牢屋之中にも一寺ツ、ありとなり、毎日罪人をして経を読み懺悔を為さしむとぞ、此方便可嘉矣、々々。

此国之寺院の廣大にして且美麗なる事實に驚然、欧羅巴ニおひて第一とす、就中イサクカセデルといふ寺ハ都の中央にあつて大伽藍なり、三帝を歴て建造成就せしとぞ、其入費察すへし、其下階の大支柱四十本皆大理石にしてつぎ無し、其長サ六丈にして周廻ハ二丈二尺、上階ニは三拾本あり、皆おなく大理石にしてつぎ無し、けれど下階乃四十本よりは少クして且短也、其頂上ニは八拾畳しき位之円形の銅製の蓋あり、皆金の延板を以て掩ふてあり、(此金は或説ニハ鍍金ナリと)、また其四隅ニは同形の八畳しき位のものあり、天氣之時ハ日光右之金蓋より返照して閃光甚シ、是ばかりはコロスタット島よりも遙ニよく見得けり、其寺中ニは種々の價物充滿して美尽し善尽せり。

ロシアにはさまざまな「宗教」があるが、中でもギリシャ正教が非常に盛んであるというのである。ここで「宗旨」という言葉も出てくるが、ここでは個別の宗教を指す言葉として使われており、具体的にはギリシャ正教を指したものである。そして、寺院の広大美麗さに驚いたことを率直に告白し、ヨーロッパで第一であるとするなどの内容が記されているが、描写は感心したためかかなり詳細にわたっている。軍隊や兵士に対する観察よりも詳しいほどであるが、政治や軍事のことと違って、ロシアでも教会は外国人が比較的自由に見ることができたという事情もあったかもしれない。それから項を改めて、次のような記述が続いている。

○国民の宗旨を信するハ国々の習ひなれと、魯国等は最も甚し、また寺数の多き事満目挙て数へ難シ、凡人共其寺前を過る時は必ず冠を取り敬シク礼拝をなし、或ハ腰を屈め頭を地ニ垂シて拝むもあり、或ハ立ながら拝するもあり、如此人は皆凡人にして僧より誑誘さ

れたる者共也、凡上の人途中辺にて如斯する事を嘗て見聞せず、今春当帝の刺客ニ逢ひ幸にして命を免れたる哉、人皆以神助とおもひ、之レガ為ニ帝の難ニ逢ひたる場所に一寺を建んと其設く設け当時最中也、宗旨信心之深き事以て知るへし。

引用は省略したが、この項目の続きには民衆が心から皇帝を敬愛している様が描かれている。ここでまた「宗旨」が出てくるが、ここでもやはり、一般的にいう「宗教」とは区別して、特定の宗教教派（＝ギリシャ正教）を指す言葉として使われていると思われ、正教に対してロシア人の信仰が厚い点について論及している。また、一般の人々は「寺前」を通過するときに拝んで礼を払うが、上流階級の人々はそれをしていないと観察し、それは一般人が僧によって「誑誘され」ているからであるからだと考察しているのである。そして森は、皇帝が民衆から非常に人気があるのは、宗教に容易に導かれる人々の純朴さと根を同じくする問題であるという考え方をしているようだ。ここでも森は、宗教に着目する視点を備えながらも、実際に人々が信仰に生きているという内面性の部分について深く考察しようとはしていない。換言するならば、信仰深き人に対して、比較的さめた眼で見ている部分があるように思えるのである。

この時点での森有礼は、人間社会には宗教という領域が存在し、その実状をつかむことはある社会を知るうえで不可欠なまでに重要であるという認識を持つに至っていた。またその一方では、人間が宗教や信仰に向かう取り組み方に対しては、いささか共感を欠く見方をしていたように評価することもできよう。しかし、そのように断じてしまうのも、これまた皮相な見方だといわねばならない。最初期の海外留学生として森は、限られた時間で駆け足のように種々の学問を修めなければならなかった。そして当然ながらそれらの学問は、時代の制約を受けていたわけであるから。この時点では宗教についてもすでに進化論的な発展段階説の枠組みが形成されており、純化した一神教と対比される民衆宗教的なものは、古い段階の宗教の残滓のように見られていた。このころ留学をして明治初期に日本で啓蒙活動をした思想家たちも、信教の自由や政教分離といったテーマについては先進的な見解を持っていたが、民間信仰的な営みに対しては、おしなべて冷たい視点を投げている。そうした学問的風潮と、制約の中で多くを学ばなければならないという重圧の中にあっては、たとえハイ・チャーチとして機能している宗教であっても、彼ら留学生にとっては、自分自身の信仰と無縁である限り、知識の対象ではあっても、内在的な理解までは必須とされていなかったのがあった。

ただし、そうした中であって森ら数人は、後にアメリカの神秘的宗教家ハリスに共鳴して、その運営するコロニーである「新生社」に身を投じる体験をすることになる。このため帰国したとき、森有礼は宗教が社会を支えるということ、単に学理のうえだけでなく実体験を通して深く理解している、日本で数少ない人物の一人になっていたわけであるが、『紀行』にみえる訪露の段階においても、森のそうした資質の萌芽は見いだすことができるのである。先述のように、ペテルスブルグにおいて森は、「此国之寺院之広大にして且美麗なる事実に驚然」と素直に記し、「大伽藍」の様子を彼特有の具体的数量を用いた詳細なる描写を載せている。他方で森とロシアに同行した松村淳蔵は、「寺院は立派なる所二ヶ所ありしも自分等未だ外教宗を奉せぬとて見物せさりし」と晩年に語っているように、自分との接点がないとして教会の見物すらしなかったのである<sup>(4)</sup>。『紀行』における森と、松村の洋行談との、宗教に対する温度差は、決して文字になった時点が違うことだけに帰してはなるまい。森有礼の場合は、宗教施設を見学し、そこで行われ

ていることを実見して詳細に書きとどめたというだけでも、当時の日本人留学生の水準を超えて宗教に関心を寄せていたと見るべきであろう。

### 【明六雑誌】の諸宗教論

かくして、「宗教」という言葉は、若き日の森有礼によってロシアの地で書きとめられたことにより、その近代的使用が始まったのであった。しかし、ヨーロッパ文化を学んだ中から、宗教という概念を習得するに至ったのは、むしろ彼だけではない。明治初期に影響力を持った啓蒙思想雑誌である明六社は、その設立にあたって森も中心人物の一人であったが、【明六雑誌】には、その社員がさまざまな視点や用語を用いて宗教を論じた文章が散見できる。そこでは、オランダ留学の経験者である津田真道が「法教」を論じ、また、蘭学からのちにドイツ学へ転じてその先駆者となった加藤弘之は、「神道」「教道」「教法」などと言っている。これらはいずれも、religionの訳語にあたる概念として用いられており、論者によってスタンスにはいくらかの違いはあれど、別の術語を使いながらも彼らが同じ概念を共有していることには変わりはない。そして「宗教」という語を使っているのは、ここでは森有礼一人に限られているという事実も見いだすことができる<sup>(5)</sup>。

こうしたばらつきは、「宗教」以外のヨーロッパ的諸概念についても、【明六雑誌】を通して見つけることができる。これは単に、当時としてはそれぞれの術語の訳が確定していなかったという事情によるものである。したがって、ある一人の論者が、現在の術語と同じ語句を使い、他の論者が違っていたからといって、思想家としてのその人の優劣を示すことには必ずしもならない。

【明六雑誌】の諸論文は、外国文献の抄訳を載せたものから、一步踏み込んでわが国の国策の方途を論じたものまで、さまざまである。ここで宗教に関連した論文の一部を、瞥見してみよう。杉亨二「俄国彼得王の遺訓」(第3号掲載第4論文、「俄国」とは俄羅斯(オロス)、すなわちロシアのことである)では、ロシアのピョートル帝の遺訓と当時信じられていた文書の内容紹介が大部分を構成する一文である。特に宗教にあたる言葉は出てこないのだが、ロシアが東欧から世界に覇を唱えるための、驚くべき権謀術数の秘策が記されたものである。その全14箇条のうち、第12条では、ハンガリーとポーランドについて、所住の「希臘教徒」(ギリシャ正教徒)を利用して、その国権を奪う方策が述べられている。杉は、全文紹介のあと、この第12条に関してのみ特にコメントを加え、ロシアがギリシャ正教を「併呑の具」としていることは明らかであり、しかもそれはわが国にもすでに入ってきていて、たとえ現状では取るに足らなくても、後日の「害」の可能性があると説き及んでいる。そして、これを防ぐ方法として、日本人が「活眼」を開いて一切の「雑教」をやめ、「宇内盛行の善教」をえらんで従うことによって、(ロシアの侵略の道具である)ギリシャ正教を超越させようと論じているのである。

ここでは、宗教のもつ、政治の道具としての側面が強調されている。それは、現実の国際情勢の中で、新興日本が信教の自由化に向かうことにともなう根元的な恐怖を代表したものといえよう。宗教政策について、日本の独立維持と密接不可分な形でしか論じることができなかった当時の現実を示す一例である。

この杉と同様の結論を提示しているのが、同じ号の第5論文として載っている津田真道「開化を進る方法を論ず」である。津田は、開化の深淺をはかる尺度を「法教」(宗教のこと)と「学問」

にみる。そして「法教」については、これまで国内で「神」と「仏」の二つが行われてきたが、海外の著名なもの（「仏」・「火」・「回」・「基」）の中では「基」（キリスト教）を「最善」としている。次に「基」の三種（「希臘」「天主」「異宗」、それぞれギリシャ正教、カトリック、プロテスタントを指す）のうち、「異宗」、すなわちプロテスタントを「最善」とし、さらにそれにも新旧の教派があつて、「新なるものは自由を主としてもっとも文明の説に近しい」と論じている。ここには宗教に対する進化論的な見方のほかに、おそらくはウェーバーの影響ともとれる考え方が見られるが、このような宗教の優劣論を津田は展開するのである。そして現状の日本人について、「地獄極楽、因果応報、五行方位など、無根の説に迷える」ことをもって旧習の「愚民」とし、「半開化の民」と断じてしまう。そこから津田は日本の開化のために、キリスト教のうち「もっとも新、もっとも善、もっとも自由、もっとも文明の説に近きものを取」れと結論づけるのであつた。

近代化のための便法と観じきっている点で、ある意味では非常に楽観的な宗教観であるともいえるが、この時代、キリスト教と西欧近代社会との関係がいかに密接であるかを知ってしまった者にとって、キリスト教化なしで日本が近代化を成し遂げうるといふ方が、あるいは考えにくいことだったのであろう。杉と津田の論は、前者が被植民地化の媒体となりうるものとして、また後者が近代化を保障するものとして、宗教をとらえているという違いはある。しかしどちらも結論は特定のキリスト教教派の国教化を是としており、いわば両者は表裏一体の関係にある論説だといえよう。彼らの意見は、当時として切迫的な動機に発していたのであるが、しかしこれらの説はまた、かなりの少数派でもあつた。それは、政策によるキリスト教国教化がはたして可能だったのかということ以前に、そもそもキリスト教が入ってくること自体が、それがどの教派であれ、背景に列強勢力があつて日本の独立を脅かすのではないかと考えられていたからであつた。ちょうどこの時は、キリスト教が明治政府より公認された直後にあつた。

当初の新政府は、明治元年（1868）に「切支丹邪宗門禁制の高札」を掲げて、旧来の方針を踏襲していた。しかしさすがに諸外国からの猛烈な批判などもあつて、明治6年2月の太政官布告第68号によって、この高札は撤去されたのだつた。特に信教の自由を宣言するわけでもなく、ただ禁制の高札のみを撤去するという、いわば消極的な方法で、キリスト教の国内布教を正式に是認したわけである。『明六雑誌』における杉や津田の論文は、国家制度としても社会通念としても、いまだ宗教がきちんと位置づけられぬままにキリスト教宣教が本格化してきた時代相を反映したものであつた。

『明六雑誌』の第4号からは西周「教門論」の連載が始まり（第12号で完結するまで6回掲載）、5号からは加藤弘之の「米国政教」（5・6・13号に掲載）も書かれている。これらも、わが国をめぐる状況の中で、宗教という領域が存在することが世間に認知されるように働きかけ、また政治との関係をどう位置づけていくべきかという問題意識に発する、啓蒙活動ととらえることができよう。西の「教門論」は、個人が信仰を選ぶ自由と政教関係のあり方を説き、信教の自由と政教分離とを、明確に主張している。西は宗教を指すのに「教門」という言葉を使い、これを「政治」と対置することによって、近代段階における祭政一致の「神教政治」を否定している。西によると両者は「本を別にする」ものであり、互いに干渉することがあつてはならないとしたのである。そして、信教の自由が保障されるべきであり、また同時に、「教門」側も、法を犯したり政治に害を与えることは不可であつて、これら世俗面に関しては政治からの規制を受けるべき

だとしたのである。これは、当時の日本の現実と照らし合わせると、前年以來の神道国教化政策を批判し、また君主に対する宗教的神聖視の醸成をいましめるものである。また諸宗教の布教の自由を、黙認という形ではなく、もっと明確に宣言せよとの提言でもあった。

加藤弘之の「米国政教」は、アメリカ人トムソンがドイツ語で著した『アメリカにおける教会と国家』の抄訳である。ここで加藤は、米国における政教分離の制度概要とその理念について扱っている。またアメリカとイギリスの宗教制度を対比して、アメリカには「奉教自由の権」があり、他方イギリスは国教制の国ではあるが、諸教派に対する「容認」（寛容）があるとしている。

森有礼が第6号に載せた「宗教」は、津田真道のキリスト教国教化論と、西周の信教自由・政教分離論をうけて書かれたものである<sup>(6)</sup>。ここで森は、「政府の職務はひとり人民の身体およびその所有を保護するにあるをもって、およそ教事は人民各自の所好にしたがいて為さしめ、もしこれによりて外頭、他人の妨害となるものは、政府よろしく法を設けてこれを制すべし」と論じているが、これは大筋において西周の主張とほぼ重なるものである。ただし西が、自分自身についても強く意識した「個人」の自由という立場から規定していくのに対して、森は国家の側から宗教をどう扱っていくかを問題としている点で、視点の相違がみられる。ここで森は、読者に評価をまかすべく、文章の大部分を翻訳紹介に費している。スイスの学者「ワッテル」と、アメリカ人「ヒリモア」（このヒリモアの訳の部分のみ、訳者は「柴田氏」となっている）の、それぞれ万国公法に関する文章がそれである。

森は、宗教はその人の内面にかかわるものであるが、公的な外見にあらわれるときは国政で扱うものとなることや、宗教に関する「人民自由」は「不好の宗教」を信じないことや官の強令を奉じないことまでであり、宗教には社会の「妨害」をなす権利まではないこと、あるいは国民の過半数が信じている宗教があれば「国宗」（国教）としてもよいことなどを紹介している。明六社の思想家たちの中にあつて森は、信教の自由を明快に論じる立場にありながらも、宗教の世俗面においては、一定の原則のもとに国家がこれを調整、制限しうることを明確にしようとしたのだ。この背景として、森の立場が、明六社の大多数を占めた官人思想家の中でも、政府において特に責任のある地位にあつたことを考える必要がある。森としては、信教の自由を保障する源泉として国家が存在するが、その目的のためには国家は宗教に対して一定の権限を留保していなければならないと考えていたのである。

外務省高官の立場として森は、列強諸国からのさまざまな政治的・経済的圧力に立ち向かわねばならず、こうした状況の中では、外国人による布教という事態において個人の自由という側面が過大に強調されないよう、日本国家の権限範囲を明示しておきたかったのではないかと推測できる。

## 結語

幕末において洋学を学んだ学者たちは、先進諸外国において「宗教」が、政治など他の領域とは明確に区別されるものとして存在していることを知った。そして、宗教進化論的な見地ではより進歩的な段階に位置するキリスト教が、どうやら近代化と密接に関わっているらしいという事情も、察することができた。そうした事情の一端は、森有礼の『航魯紀行』の記述からも窺い知れるものである。



やがて彼らは、新しい日本の体制づくりの時期に直面することになる。彼らにとって日本の宗教事情は、いまだ雑多な諸信仰の混在が主流であると見えたことや、宗教と政治その他の境界があいまいであることとにおいて、前近代的なものとして映っていた。わが国が文明に後れをとったことを、まさに象徴するようなひとつの事実として認識されたのである。

このことから、宗教制度づくりに近代化のひとつの鍵を見だし、ここに大きな期待をかける有識者の考え方が出てくる。しかしその反面で、外国の宗教の広まりが日本の独立を危うくするという危機意識も、根強いものがあつた。『明六雑誌』の諸論者たちは、先進諸国における宗教事情や制度を紹介しつつ、各人の抱くところの、あるべき日本の宗教制度論を展開したが、その背景にはこうした意識が多少なりとも反映されているのだった。一見、純粋に理想論が述べられているかに見える場合でも、やはり現実に当時の日本がおかれていた政治状況や社会環境を無視しては、議論を展開し得なかったという歴史的状況が、そこから浮かびあがってくるのである。

#### 註

- (1) 大隅和雄「中世仏教の諸相」（『中世思想史への構想』、名著刊行会、1984）。
- (2) 大久保利謙編『森有禮全集』第二巻（宣文堂書店、1972）所載のものを参照した。ただし、引用に当たって旧漢字は新字体に改め、原文中の割注は〈 〉で示した。なお、本稿では『森有禮全集』を以下『全集』と表記する。
- (3) 大久保利謙「森有禮の『航魯紀行』—日露文化交渉史の一齣—」（『月刊ロシア』第7巻4号、1941）。
- (4) 「海軍中將松村淳蔵洋行談」。もとは『薩摩海軍史』中巻（1928）に採録されているが、本稿では『全集』中巻に所載のものを参照した。なお、『全集』の解説によると、この洋行談は「出典はないが、おそらく編纂（引用者注、『薩摩海軍史』編纂のこと）に当たって同人の談話を徴したものであろう」とのことである。
- (5) 『明六雑誌』第6号第4論文「宗教」（明治7年（1874）4月）。なお、『明六雑誌』については、第13号までは岩波文庫版（1999年5月刊）を、14号以降は大空社の復刻本（『明六雑誌語彙総索引—付復刻版明六雑誌—』、1998年5月刊）を参照した。また、引用にあたっては、岩波文庫版の体裁に習って漢字平かな交じり文で表記した。
- (6) 前注と同じ。なお、『明六雑誌』の本文の箇所では、論文のタイトルが「教宗」となっているが、表紙・目次および本文中の記述では「宗教」となっており、岩波文庫の注にあるように、これは単なる誤植であろうと思われる。

## Modernization and 'Religion'

Teruyoshi YONEI

The scholars who studied modern European studies in the closing days of the Tokugawa Government realized that there is a general idea of 'religion' and that it was strictly distinguished from other categories such as politics, economy, and so on. They also understood that modernization is inseparable from Christianity in Western Europe.

One of these Japanese scholars, Mori Arinori, later the first Minister of Education, used the term of 'shukyou (宗教)' in its modern sense for the first time in Japan in his travel notes 'Kouro-Kikou' while visiting St. Petersburg, Russia.

In the Meiji Restoration era, they were faced with the task of restructuring the Japanese system, including the legal system as it regards about religion. On one hand they expected religion hold the key to modernizing Japan, and on the other hand they were afraid that liberalization of the propagation of Christianity would cause harmful effects for Japanese independence. This situation influenced authors of the 'Meiroku-zasshi' when they developed their 'enlightened' visions of religion.